

タイトル：香港における「全職パパ」の社会学的考察

Tsang Ka Yan (神戸大学人文学研究科院生)

一、問題意識

香港の男性はどの年齢層でも性別役割に対する伝統的な観念を持ち、社会階層に関わらず、仕事の成功は男性の身分の構築の基礎で、仕事から得た経済的資源によって自分が大黒柱を担い、家族が安定した生活を送れるという伝統的な性別規範を実現することが最も重要と考えている。家計を支える能力だけではなく、女性より高い能力と社会的地位を持つことから男性の尊厳、自信と「面子」を構築している（香港平等機会委員会、2012）。一方、1986年から2015年の間に、主婦に就く女性が徐々に減少しながら、男性主夫の数が約5倍に増えた。このような背景を踏まえ、本調査では、日本での「イクメン」のようにブームが現れた「全職パパ」（広東語では全職爸爸）という現象を中心としている。「全職パパ」の厳密な定義がないため、本論で用いられる「全職パパ」（Stay-home-dad/father）は「主夫」（Househusband）よりも父親の身分を強調して、日常的に家事や育児という無償労働を中心に担っている男性と定義している。男性が全職パパを担う経緯から、稼ぎ手役割から降りて全職パパになるという選択の意味を明白にしなが、彼らは家庭でどのような役割を担っているのか、どのように全職パパ役割を獲得するのかを明らかにしたい。

二、研究目的

以下の点について、本論で明らかにしたいと思っている。

- 1.なぜ男性が全職パパになるか。こういう男性、そして家庭には何か特徴があるのか。
- 2.全職パパがどのような役割を担っているか。その役割はどのような経緯で獲得したのか。
- 3.男性が全職パパになるのには期間が付いているのか。全職パパの進路はどうなるのか。

三、調査方法

質的調査、半構造化インタビューである。

四、調査結果

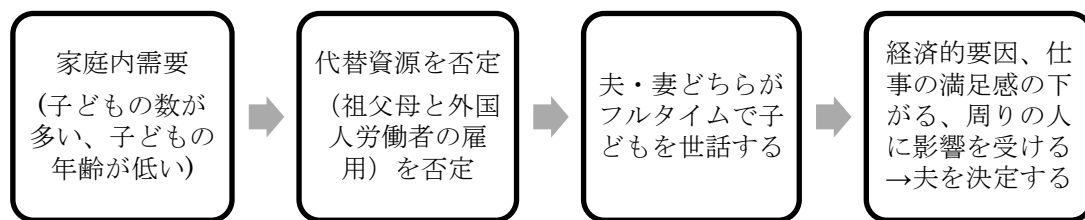
①全職パパの個人的特徴

- 1.高学歴、専門職を就いたこと
- 2.全職パパを担うながらフリーターを就いたこと
- 3.公務員など年功序列の形で採用されない
- 4.教育熱心
- 5.初婚年齢は香港男性の平均より低い

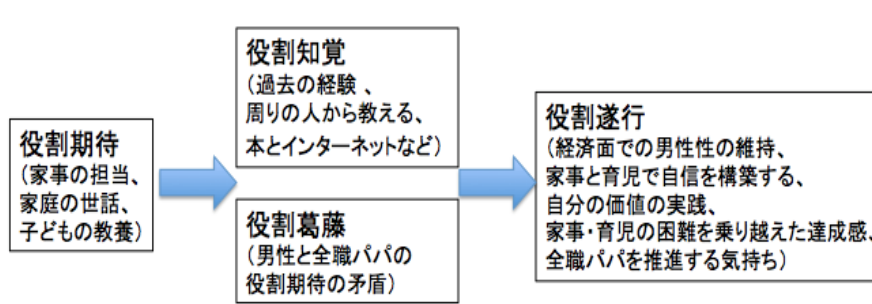
全職パパの家庭特徴

1. 核家族
2. 世帯収入が高い
3. 持ち家を持っている家庭が多い
4. 全職パパ家庭の子どもの数が多い、年齢が低い

②全職パパになる経緯



③全職パパの役割取得の過程



五、まとめ—社会変化の産物である全職パパ

今回の調査の発見である男性が全職パパになる経緯に、子どもの誕生をきっかけで夫婦が自分たちの手で子どもを育つことを決意した。しかし、夫婦間が性別役割分業の配分する際に、経済的の考慮の影響力はかなり大きい。つまり、妻の収入の方が高い場合は、妻が主の稼ぎ手の責任を担って、夫が家事を育児のことを担当することになる。それに、就労形態の高度的な自由度は全職パパを促す環境の要素の一つと考えられる。調査の対象者がほとんどフリーランスに就いている。フリーランスの特徴はバイトよりも時間と場所を選択権利が多く、時間的余裕の時に自宅でもできること。このようなフリーランスの収入で一部の家計を支えることを通じて、男性性を維持することができる。さらに、現在の香港では全職パパに対する態度は非常に開放的と言えないが、メディアが発信を通じて、社会が全職パパへの認識も少しずつ増やせると考えられる。性別役割は社会の変化に沿って変わって行くもので、現代香港における全職パパは単に家事と育児の役割を担うだけでは

なく、彼らは「家事と育児・ワーク・ライフ・バランス」というライフスタイルを提示している。積極的に男女平等を向かっている香港では、伝統的な性別役割とジェンダーステレオタイプを突破して、男性と女性との性別役割を柔軟的に交替できる家族が増えるようになるだろう。